

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Three Problems Concerning Japanese Accent — Pitch Consciousness, Efficacy of Accent Rules, and Accentually Classified Words —

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古, NAKAI, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1869

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日本語アクセントに関する3つの問題

—音調意識、アクセント規則の有効性、類別語彙—

中井幸比古

はじめに

日本語アクセント（以下「ア」）の、①音調意識（高低の把握）、②ア規則（形態音素論的規則）の有効性、③類別語彙各語の頻度・馴染み度の、3点について論じる。紙幅の関係で、①は中央式諸ア記号付き方言辞典を、②は共通語ア（首都圏で優勢なア）を、③は類別語彙各語の現代共通語での頻度・馴染み度を扱う。この3点は、日本人（日本語母語話者）が自分の方言以外のアを、外国人（外国語母語話者）が共通語アを習得する際に重要。①は方言ア資料としての利用の際にも重要で、③はア調査語彙改訂の基礎作業の一部でもある。

要旨は稿末に置く。

1. 中央式諸方言の方言辞典にみる音調意識

1.1 アクセント記号付き方言辞典の一覧

音調意識については日本人・外国人ともに共通語アの研究は数多いが、方言アに関するものは少ない。そこで中央式諸アにつき、ア記号付き方言辞典を考察する。方言辞典のアは著者の内省による場合が多いが、正しい記号が付いているとは限らないから、利用のためにその音調意識の解明が必要な場合がある。また、種々の誤りは、中央式ア以外が母方言の日本人や外国人が中央式ア習得途上で起こす誤り・中間方言（言語）と関係する可能性が高い。共通語アでネイティブの音調意識の難易と余所者の知覚難易に相関が見られるからである（語中核型相互、特に第3拍以降の核相互がともに難など）。

対象となる方言辞典につき、筆者が関係したものを除き、管見に入ったものをア記号の精度・タイプ別にあげる。

(a) すべての型が書き分けられており、かつその音調把握が正しいもの。

a1 牧村史陽1955『大阪方言事典』杉本書店。高低2段階。拍内下降も明記。

a2 富田大同1969、1970、1971、1971、1972「兵庫県小野市方言稿」(1)～(6)『明石工業高等専門学校研究紀要』7、8、10、11、12。和田實の方式による式・核表記。高低2段階の音調型との対応関係も明示。

a3 土居重俊・浜田数義1985『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団（但し幡多アは東京式で本稿の対象外）。高低2段階。語末核は「ア下型」と表記。

a4 興津憲作1990『淡路方言 特徴・語法・ア・語彙』淡路文化会館運営協議会。高低2段階。語末核も表記。ア体系枠は京阪都市部と同じ。以下「興」。

(b) 自立語単独発音の場合の全部の型が書き分けられ、かつ音調把握が正しいが、助詞付きではじめてわかる型の区別は書き分けられないもの。

b1 高田豊輝1985『徳島の方言』、同2012『徳島の方言補遺及び徳島市南部と周辺の地名』（著者刊）。形式上3段階だが実質的には高低2段階。

(c) ある程度は正しい記号が付けられているが、型の書き分け不十分、音調把握が一部不正確等の部分があるか、一部の型のみ記号を付すもの。

c1 田中萬兵衛1934『淡路方言研究』（福浦藻文堂書店。以下「田」。1974年国書刊行会影印本は後述のようにア記号に関する欠陥がある）

c2 小林清次1974『大阪府能勢方言辞典』能勢郷土文化の会（1974/9/15発行再版による）

c3 楠本静哉1996『口熊野の方言』著者刊（和歌山県西牟婁郡上富田町方言）

c4 中西信弥1999『西陣織屋ことば辞典』著者刊（京都府船井郡園部町方言・京都市方言〔著者経歴同書参照〕）

(d) 記号と音調・音調型との対応関係が筆者には不明のもの。

d1 金沢治1972『阿波言葉の辞典（改訂版）』徳島市中央公民館

以上のうち(a)(b)は優れた資料である。(b)に付属語付き音調がないのを欠点とする人もあろうが、(a)も用言の活用に伴うア交替は示さないわけで、(b)も一つの立場として問題ない。(c)は部分的にア資料として利用可能であり、本稿ではこれに重点を置く。上記のようにア習得関連資料として興味深く、利用のために記号の原則を探ることも必要。(d)は問題が多いが一応触れる。

順序が上と異なるが、d1、c2、c3、c4、c1の順に考察する。

d1金沢（1972）は凡例に「アは主要なものについて強だけを○〔白丸圏点。辞典本体では仮名の横に付けられている—中井注〕を以って示した」とある。共通語アなら「強＝ア核」で音調型を表記し分けられる。ア核がある拍は、例えばア核の次の拍より若干強く、強弱によるア表記も全般的な外れではない。英語アの記述方法の日本語への機械的当て嵌めにすぎないにせよ、核位置を正しく指摘しさえすれば実用上問題ない。しかし、共通語と異なり、中央式アは核だけでは一部の型しか区別できない。また本書の各語のアを見ると、非常に近い方言を扱う b1高田（1985他）との対応関係が不明で、型の区別全般に問題がありそう。ともあれ英語・共通語アと類似の枠での記述の試みとして評価できよう。

c2小林（1974）は一部項目のみにア記号を付ける。「アは、絶対必要なものだけにした」（p.9）、「この辞典のアは、全部にはつけていないが、それをつけ

ないと方言にならないものには悉くつけた」(p.132)とするが、その基準を示さない。そこで近い地域の方言を扱う a1 牧村 (1955) と対照すると、ア記号付き項目は、a1 で H1 (高起平進式第 1 拍に核)・L2 (低起上昇式第 2 拍に核)・L0 (0 は無核) の語にほぼ限定。そして H1 は第 1 拍、L2 は第 2 拍、L0 は最終拍の横に、ピリオドを付す。但し 2 拍 L0 と L2 は原則的に区別なし。また H1、L2、L0 の全項目に記号が付いているわけではなく、記号の有無は共通語アとの対応とも関係が薄いようで、例えばオーカメ (狼) H1 は共通語アのオーカミ 1 に近い音調だが記号付き。ともあれこの辞典でア記号付きの場合は資料として利用可。また H1、L2、L0 を当該方言の特徴的なア型と考えていることがわかる。共通語アで、特に 3 拍目以降に核がある語中核型相互の型の知覚や区別意識が鈍い人があるが、本資料のア付けもこれと矛盾しない。但し L 式は核位置を意識しやすい (c4) はずでそれとは一致しない。無核は H0 より L0 を特徴的と考える点も興味深い。なおこの方言では H2 の語は僅少か。

c3 楠本 (1996) は高低 2 段で全項目に記号を付ける。このアは高知市等と同様古い中央式の特徴を有する：例えば L 式は早上がり、用言・複合名詞ア等中近世風。しかし本書自身、ア記号は「腰だめの域を出ない」(p.23) というように、下降位置が他方言と対応しない項目がかなりあること等が問題。ごく一部を挙げれば、「あぶらしぼられた [高低低高高高低。H1+H3 が正?]、泣いてもわろても [高高低低高高低低。H1+H2 が正?]、びっくりする [高高高低低。H0+H0 が正?]、むさんこに (無闇に) [高高高高低。H0 が正?]」等。ア体系の枠の意識がないためか。この辞典だけから各語の音調型を決定するのは危険が大きい。

c4 中西 (1999) は、高中低の 3 段階表記で全項目に記号を付す。① L 式有核と H1 は、核のある拍が高、それ以外の拍が中。② H1 以外の H 式有核 (H2・H3・H4...) は核までが中、核より後が低。③ H0 はすべて中。④ L0 は低と中で示される。低から中への上昇位置は原則早上がりだが、主に前部 2 拍の複合語は第 3 拍から高。⑤ 2 拍 L2 と L0 は [中高] と [低中] で区別あり。L0 の早上がりは旧船井郡園部町アのため。ただ以上の原則には若干例外や不統一等がある。そのため c としたが a に属させてもよい。音調表記で興味深いのは 3 段階の高を H1 と L 式有核だけにあてていることである。1 拍卓立は目立つのだろう。なお個々の語のアは比較的新しい：例えば「式保存の例外古→式保存新」のタテへ (整経) H0→L0 (タテ L0 [縦糸] をヘル H0 [整える]) が L0 等。

残るは c1 田中 (1934) だが、これについては詳細に検討するため節を改める。

1.2 田中萬兵衛『淡路方言研究』の音調表記

c1田中（1934）（「田」）の「下篇語彙篇」は見出しにア記号を付ける。「田」は全国的にもア記号付き方言辞典の初期のもので、中央式アでは最初か。しかしそのア記号の意味や精度も不明確で、利用も少なかった。そこでこれを詳しく検討し、資料価値と音調意識を探る。

著者の田中及びその方言研究につき、和田実（1950）「淡路の田中万兵エ翁」『近畿方言』6 pp.9-11に詳しい紹介がある。それによると田中は淡路島松帆出身で当時69歳というから1880年前後生。松帆は現淡路市岩屋松帆（淡路島北端）と南あわじ市松帆（旧三原郡西淡町。淡路島西南部）があるが、「本書に附したアは三原郡のそれである」とあること等から後者と見てよい。田中は戦後方言研究から遠ざかっていたが、和田の熱心な勧誘の結果『近畿方言』7（1950）pp.16-17に戦前原稿作成の「米櫃」「蚯蚓」の方言地図を掲載。但しその他の活動再開は未詳。和田紹介文にはアへの言及はない。

1.2.1 考察方法

「田」のア記号は、「凡例」「緒論」に説明があるが明瞭とは言い難い。そこで「田」語彙編の各項の記号から用法を帰納し、その後に凡例・緒論等を見る。また淡路の他のア記号付き方言辞典 a4興津（1990）（以下「興」）と対照する。「興」によれば興津は1925年淡路島南淡町阿万（現南あわじ市）出身。田中より45年前後年下で地域も異なるが、松帆から阿万まで平地で繋がり方言も近いと思われる。実際アはかなりよく対応し、体系もほぼ同一のよう。その他必要に応じ、徳島ア（b1高田1985）、幡多アを除く高知ア（a3土居・浜田1985）、京阪地方諸ア（a1牧村1955及び各種資料）を参照する。

1.2.2 語彙篇のアクセントの検討

語彙篇のアを体言（名詞・代名詞・形容動詞・副詞等）・動詞・形容詞に分けて検討する。品詞は「田」の分類と一部異なる。語彙篇の項目のうち「方言の様であって実は東京語」は原則としてア記号なしなので対象外。「雑辞」（接辞・助詞・助動詞等）は「方言の様であって実は東京語」でもア記号付きの場合があるが、自立語の表記法によっており無理・不明の点が多く対象外とする。

1.2.2.1 体言について

「田」のア記号付き体言のうち「興」にもあるのは340項目。意味や語形の多少のずれは含める（以下同様）。340項目のうち、2項目以上につき「田」と「興」に対応関係が見られる音調型表記が282項目あるので、まずこの282項目について表1に示す。「田」のア記号をワープロ記入のため以下のように置換した。

○：見出し（縦書き）の拍の左側に傍線等のア記号が付いていないもの。

一：文字左側の傍線。2文字以上にわたる場合「田」は1本の線で繋いでいるが、本稿では分けた形で示す。

●：文字左側の黒丸。下の▲より大きく、傍線とともに出現しない。

▲：文字左側に小黑丸（「ピリオド」と呼ぶ）+1字分の傍線。必ず傍線とともに出現。

←と→：文字左側の矢印。矢印は2文字分以上に亘るが、矢印記号1つだけの場合と、矢印記号+傍線で全体が長い矢印になっている場合がある。また矢印記号は2文字分と1文字の2種があり、前者の方が多い。しかし矢印は内部に切れ目がなくてもあっても、全体として見れば相互に区別の必要なしと判断したため、本稿では印刷の都合上1字分ずつの、矢印記号と傍線の組み合わせで統一する。

なお、「田」のピリオド（本稿の▲。傍線付き）は、国書刊行会刊影印本では凡例部分を除き（凡例部分のピリオドは語彙篇のものより少し大きい）、すべて消えている。ピリオドをゴミと誤認して削除してしまったのだろう。「田」には実際ゴミらしい物もあるが、傍線左側のピリオドの大部分は意味があり、削除不可。従ってアの考察には国書刊行会版は使用できない。但し国書刊行会版はピリオド以外はア記号も含め変更はないよう。

表1左端「評価」欄の記号について。★は「田」が「興」と同じ音調型を表記しようとしたと判断する物。H0?、H3?等と書いたのは、「田」の記号からはその音調型と考えられるが「興」と一致しないもの。このうちH0?の項目数が非常に多いが、これは「田」ではア記号なし（○、○○、○○○…）で、H0を示すこともあるが、むしろア記号の脱落の場合も多いためのようである。H0?以外にも印刷ミスのおそれがある物を含む。

表の「評価」欄で★を付けたものに基づき音調型の一覧表（次頁）を作る。一覧表中で*付きは実例がなく推定したもの。

H式はこの表記法で問題ない。しかしL式は4拍以上有核の表記法が不明

評価	拍数	田中	興津	項目数
★	2	○○	H0	19
L0?	2	○-	H1	2
H0?	2	○○	H1	8
★	2	-○	H1	24
★	2	○-	L0	9
H0?	2	○○	L0	2
L0?	2	○-	L2	2
H0?	2	○○	L2	2
★	2	○●	L2	6
★	3	○○○	H0	28
H2?	3	--○	H0	2
L2?	3	○-○	H1	2
H0?	3	○○○	H1	2
★	3	←-○	H1	9
H0?	3	○○○	H2	6
★	3	--○	H2	6
L0??	3	○○-	L0	4
H0?	3	○○○	L0	4
★	3	○-→	L0	19
★	3	○-○	L2	20
H0?	3	○○○	L2	14
L0?	3	○-→	L2	2
★	4	○○○○	H0	25
★	4	←--○	H1	3
★	4	○-○	H1+H1	3
★	4	---○	H3	7
H0?	4	○○○○	L0	6
★	4	○--→	L0	15
?	4	○○--→	L0	2
★	4	○←-○	L2	2
★	4	○-▲-	L3	10
H0?	4	○○○○	L3	6
H3?	4	---○	L3	3
★	5	○○○○○	H0	4
H0?	5	○○○○○	H3	2
★	5	○--→○	L4	2

表1 「田」「興」の体言ア対照表

確である：矢印方式と▲方式が混在し、統一がとれていない。そこで「興」で4拍以上L式有核かつ、「田」が掲載する全項を取りあげて表2に一覧する。一部表1と重複する。これを見ても新たに明らかになることは少ない。4拍L2に○←○だけでなく○←○も有りそうなこと、L3に○←▲だけでなく○○←○も有りそうなこと以外はよくわからない。

2拍	3拍	4拍	5拍
H0 ○○	H0 ○○○	H0 ○○○○	H0 ○○○○○
H1 ←○	H1 ←○○	H1 ←○○○	H1 ←○○○○
	H2 ←○○	H2 *←○○○	H2 *←○○○○
		H3 ←○○○	H3 *←○○○○
			H4 *←○○○○
L0 ○←	L0 ○←→ (○○←も)	L0 ○←→→	L0 ○←→→→
L2 ○●	L2 ○←○	L2 ○←○○	L2 ?
		L3 ○←▲←	L3 ?
			L4 ○←→→○

1.2.2.2 「田」の凡例によるア記号の説明

「田」の凡例 p.1に、アに関する以下の記載がある。仮名遣・漢字を現行の物に、縦書を横書に改め、また音調記号は本稿のものに置換した。

[引用開始] 1、日本語のアは英語等のや [ママ] に音の強弱によるのは極めて稀で、大抵のものは音の高低である。その表記法は種々あろうが、此の書では次のように定めた。

(1) 発音に高低強弱の無いものは符号を付けない。

(2) 発音の高低は高音部の左側へ「←」の符号を付け、順次高くなるものには「→」、順次低くなるものには「←」、高まって行って又下るものには最高部に・を加えて「←・←」とする（中井注：傍線の長さは2字分で上の←と同じで一本の線に繋がっており、その中央部に「・」。この凡例の「・」は語彙篇の▲のピリオドより文字サイズが大きい）。

尚次に例をあげて音階符号をつけてあるから大体それによって了解されたい。

ドドド	レレレド	ハミレド	ドレレミハ	レミレド
だんま	だいなん	ゆきひら	ぼんのくぼ	あけすけ
○○○	←←←○	←←←←	○←←←→	←・←○

評価	拍数	田中	興津	項目数
★	4	○←○	L2	2
L2	4	○←○○	L2	1
?	4	○←○○	L2	1
?	4	←○○←	L2	1
H0	4	○○○○	L3	6
L3	4	○○←○	L3	1
★	4	○←▲←	L3	10
L0	4	○←→→	L3	1
?	4	←○→→	L3	1
H3	4	←←←○	L3	3
L3?	5	○←▲←←	L2	1
★	5	○←→→○	L4	2
L3?	5	○←→○○	L4	1
L0?	8	○○←←←←←	L5	1
L4?	8	○←←▲←←←←	L5	1

表2 4拍以上L式有核体言の「田」「興」対照表

(「あけすけ」の・は傍線付き。・は上記の・と同サイズ)

(3) 発音に強弱の別あるものは強音部の左側へ「・」を付ける(中井注:この・は語彙篇では、もっと大きな黒丸で(2)のピリオドとは別記号であるが、ここでは(2)と同サイズになっている)。[引用終了]

「田」の黒丸・ピリオドの大きさは、大中小3種が混在する。凡例では「中」で統一されており、(3)の2拍L2型の第2拍と、(2)の傍線左側に加えられたものの大きさは同じである。ところが語彙篇では、(3)の2拍L2型の第2拍は「大」、(2)の傍線左側のものは原則「小」(ピリオド)で、「中」はない。但し、(2)の傍線左側の物は1例だけ「大」がある:「だんなんし(旦那衆)」○—●—○(p.73)のナの傍線右側の丸が「大」。このような凡例と語彙篇の大小の不統一が、国書刊行会復刻版のピリオド削除の原因の一つであろう。

上に引用した「田」の凡例につき、前節で述べた「興」との対応関係を考慮に入れた上で検討する。上記順序と異なるが、(1)(3)(2)の順に述べる。

(1)「発音に高低強弱の無いもの」は、上述のようにH0をさすと思われるが、語彙篇ではア記号が脱落した他の型の語も含むと思われる。

(3)「発音に強弱の別あるもの」の強音部とは、2拍L2型の拍内下降を伴う2拍目をさすと思われる。3拍L3等もありうるが「田」に実例はない。

(2)3項のうち、この(2)はもっとも難解である。まず、(2)末尾の用例のア型は、「興」との対応から、だんまH0(牝馬)、だいなん(大海)H3、ゆきひら(行平[土鍋])H1、ぼんのくぼ(盆窪。語彙篇はボンノクソ)L0、あけすけ(明け透け?語彙篇になし)L2と思われる。通常の音調表記だと、「だいなん」がレレレドH3だとすると、「だんま」H0はレレレとすべきだろうが、ここではドドドで、H0を「低平」の音階で示す。これは戦前の東京ア辞典で無核型が傍線なしであることと関係するか。あるいは物理的にH0語頭拍のF0値がH式有核のそれよりやや低いのかもしれないが未詳。

次に(2)の記述をA~Dの4点から考察しよう。

A「高まって行って又下るものには最高部に▲を加えて「—▲—」とはL式有核(語末核を除く)の場合だろう。—をどの範囲に付けるかが不統一だが、ごく少数の例外を除き、少なくとも▲と前後1拍の合計3拍には付いている。

B「高音部の左側へ「—」」は、H式有核の、核までの高音部に付いている。H0は(1)にあるように無印である。またL式の最高拍にも使う:2拍L0○—、3拍L2○—○に多くの例があり、それ以外にも少数ある。但し、2拍L0・3拍L2以外はACDのどれかの方法を取ることが多い。

C「順次高くなるものには「—→」」。この記号はL式無核の2拍目以降語末まで付けるのが原則。しかし例えば5拍L4型に「○—→○」の例がある。

これは上記 A に従えば「○ー▲ー」等と表記されそうで、実際その例もある：「ばんじょづち ○ー▲ー（番匠槌）」(p.91 仮名表記を少し改めた。この語は「興」にはない)。さらに上記 B からすれば○○○ー○の表記も可能だろう。

D 「順次低くなるものには「←ー」は、H1の語頭からー2番目の拍まで付けるのが原則。しかしL式有核の4拍L2に○←ー○（つばくろ(燕) p.61)の例がある。4拍L2はー▲ー○や○ー○○の表記も可能だろう（ー▲ー○の実例は上記引用文の「あけすけ」のみ。語彙篇に実例なし）。

以上の諸点を考慮に入れてL式の表記を考えると、L0は、①ー→を使った物と②ーを使った物の両方が可能。L式有核は、①ー→か←ーを使った物[方向観]、②ーを使った物[段階観]、③▲を使った物[方向観+段階観]の3通りが可能。

上記凡例の考察をもとに型の一覧表を再度作成する。*付きは新たに付加した音調型で、語彙篇ア記号付き体言全項目リストに例が見られないものである。なお、誤記誤植が疑われるものを除き、この枠組で本書全体のアを扱える。

L0	○ー	L0	○ー→	L0	○ー→→	L0	○ー→→→
		L0	○○ー	L0	*○○○ー	L0	*○○○○ー
L2	○●	L2	○ー○	L2	○←ー○	L2	*○←ー→○?
				L2	○ー○○	L2	*○ー○○○
				L2	ー▲ー○	L2	*ー▲ー→○
				L2	*ー▲ー→	L2	*ー▲ー→→
				L3	*○ー→○	L3	*○ー→○○
						L3	*○○←ー○?
				L3	○○ー○	L3	*○○ー○○
				L3	○ー▲ー	L3	*○ー▲ー○
						L3	*○ー▲ー→
						L4	○ー→→○
						L4	*○○○ー○?
						L4	*○ー→▲ー

1.2.2.3 動詞のアクセント

「田」のア記号付き動詞項目のうち100が「興」にもある。両者のアを表3(次頁)に対照する。拍数欄左側数字は終止形の拍数、右側の数字は5が5段・1が1段活用を示す。ア欄は名詞同様「興」と一致するものに★、それ以外のものにア型をあげる。体言のアの枠内で扱える。「田」と「興」のアはここでもかなり一致する。「田」のアを纏めると以下ようになる。

25	H0	○○	25	L0	○ー		
31	H0	○○○	31	L0	○ー→		
35	H0	○○○	H1	←ー○	35	L0	○ー→
41	H0	○○○○	H1	←ー→○	41	L0	○ー→
45	H0	○○○○	H1	←ー→○	45	L0	○ー→

31はL0（京阪都市部に同じ）、35・41・45はH0・H1・L0（H1は京阪都市部にはない）である。35・41・45のH1の残存は「田」「興」でそれほど違いがない。但し「田」でH0に見えるものの一部は記号脱落の可能性があり、実は「興」よりH1が多い可能性もある。

拍数	ア	田中	興津	語数
25	★	○○	H0	3
25	★	○ー	L0	5
31	★	○○○	H0	6
31	★	○→	L0	3
35	★	○○○	H0	20
35	L0	○→	H0	1
35	H1	←○	H0	1
35	★	○○○	H1	4
35	★	←○	H1	17
35	H1	←○	H1、H0	1
35	★	○→	L0	1
41	★	○○○○	H0	8
41	H1	←○	H0	3
41	H1	←○	H0、H1	1
41	H1?	←○	H1	1
41	★	←○	H1	3
41	★	○→	L0	2
45	★	○○○○	H0	9
45	H0	○○○○	H1	2
45	★	←○	H1	1
45	H0	○○○○	H2	1
45	★	○→	L0	1
51	L0?	○○→	H0	1
51	H1	←○	H0	1
55	★	○○○○○	H0	1
55	H1?	←○	H0	1
65	★	○○○○○○○	H0	1
65	H1?	←○	H0	1

表3 「田」「興」動詞アクセント対照表

表4で「興」の掲載有無と無関係に、35のH1の残存を高知・徳島と比較する。35のH1のみを扱うのは該当語数が多いため。高知にH1が最もよく残ることが予想されるので土居・浜田（1985）でH1の語を全部抜き出す（表4上半分）。表中**を付けたのは意味や語形が少しずれるもの。表から分かるように「田」H0・高知H1が8語ある。また「田」H1で、徳島・高知の片方がH0の語も表4下半分に示す。表から6語が該当し、先の「田」H0高知H1の8語に近い数である。この6語は類別語彙を含まず、アの出自不明瞭な語が多いが、表上の8語には「動く、移す、や

田中	興津	徳島	高知	見出し	意味
○○○	H0	H0	H1	あずる	持て余す
○○○	H1	なし	H1	もがる	故意に反抗する。
○○○	H1**	H1**	H1**	いのく	動、静かに少々動く
○○○	なし	H0	H1	やつす	飾、おめかしする
○○○	なし	H1	H1	うつす	器物の中の物をあける
○○○	なし	H1	H1	まざく	間引
○○○	なし	H1	H1**	かやす	反吐をかく
○○○	なし	なし	H1	いのぐ	凌、困難から離れる
←○	H1	H1	H1	あらく	間が開く
←○	H1	H1	H1	かぶる	口を大きく開いて喰ひつく
←○	H1	H1	H1**	いがる	駄々をこねる
←○	H1	H1	H1 1段か	ほぜる	ほぜくる
←○	H1	H1**	H1	かかる	合格する
←○	H1	H1**	H1**	せせる	少許の地所等を取り込む
←○	H1	H1**	H1**	ねずる	舐
←○	H1	なし	H1	かづく	頭の上からすっぽりと被る
←○	H1	なし	H1**	あがく	寝癖が悪い
←○	H1、H0	H1	H1	かたぐ	担
←○	なし	H1**	H1	はやす	尊語、神に供へた鏡餅を切る
←○	なし	H1**	H1**	よぼる	器物からこぼれる
←○	なし	なし	H1	うぐう	灸跡が化膿する
←○	なし	なし	H1	かたぐ	掠奪婚
←○	なし	なし	H1	かぶく	稲が実って穂が垂れる
←○	なし	なし	H1	しわる	撓、曲る
←○	H1	H0	なし	たぐる	咳をする
←○	なし	H1	H0	せぶる	他人より物をせがみ取る
←○	H1	H0	H0	どやす	殴打する
←○	H0	H1	H0	へずる	一部分を分ち取る
←○	なし	なし	H0	へばる	粘着する
←○	なし	なし	H0、H1	ぐずる	強請る

表4 「田」「興」徳島・高知3拍5段H1対照表

(淡路語) 淡路ア型	○←—	— — — ○	○—○○	— — — ○○○○
	L0	H3	L2	H3
(東京語) (淡路語) 淡路ア型	オモテデ ○— — ○	アソブニワ ○— — ○○	ヨイ — ○	テンキデス — ○○○○
	— — ○○	○○○○○	○—	← — ○○○
	H2	H0	L0	H1
(東京語) (淡路語) 淡路ア型	カルイワ ○—○○	ナガレ ○—○	オモイワ ○—○○	シズム ○○○
	← — ○—	← — ○	← — ○—	○○○
	H1	H1	H1	H0

3例文のうち上2つは神保格・常深千里『国語発音ア辞典』（厚生閣）昭和18年第19版 pp.23-24にあるが、最下は未詳。神保他は辞典本体では東京アの平板型を傍線なしで表記するが、この例文では低高...として高部分に線を引く。従って最下例文のシズムは準アを考えなければ○—とすべきだろう。

「淡路ア型」欄に「田」の記号から帰納されるア型を私が記した。最後の例文の、カルイワ・オモイワの←—○—における最後の—はカルイとオモイを対照して助詞を卓立させた音調か誤植か。一旦下がって○になった後に—が再度現れる誤植は「田」に多い。第2例文のアソブ○○○は1類所属で、中央式でもH0が古形だが各地でL0に変化している。古形の表記であろう。

1.2.2.6 田中のアクセント観について

以上から「田」の音調記号は音調型と1対1になっていない部分や誤植の類を除き、現在調査不能な世代のア資料として有用であることがわかる。

「田」の序文には東條操・柳田国男が指導と援助をしたとあるが、指導が淡路アにまで及んだとは考えにくい。「田」が段階観による東京ア記述を参照して淡路アを記述しようとしたが、方向観の観点も必要と考え、それを記号に反映させた。しかしそれが不徹底だったため、音調型対記号が1対多の部分が多く残ったのだろう。「田」の記号は独自の考案と思われる。1934年当時、京阪式アを一貫して方向観で解釈した人に池田要がある。その卒論作成は1931年頃らしく（上野2002 p.3）、池田のほうが早い。体系として整備されてもいる。しかし池田論文公開は日本方言学会編1942『日本語のア』（中央公論社）だから、相互に独立に研究したのだろう。「田」はア研究史上も重要である。

2. アクセント規則の有効性について

本節では共通語アの形態音素論的規則（複合名詞、外来語等々のア規則）とその有効性について述べる。具体的には以下の2点を考察する。(a) 単語ア予

測のための規則の数・内容、各規則の一般性・有効性。語彙の使用頻度等による順位と規則の有効性との関係。(b)規則からアを予測できず一つずつ記憶が必要な語彙の量や順位との関係。

2.1 アクセント教材における規則の扱いと問題点

日本人向けの共通語ア教材・参照資料は戦前から数多いし、最近では外国人向けの共通語ア教材も一定数ある。日本人向けで最も包括的なのは秋永編(2010、2014)で、辞典の全見出しに100のア習得法則の番号を振る。これ1冊で一応実用上はかなり事足るが、「法則」といっても傾向に留まるものも多く、中には「法則らしいものがない」(和語の単純名詞等)ものも「法則」として掲載；量が膨大で取っつきにくい面がある；他の共通語ア記述研究を参照すると若干補訂が望ましい法則もある；今では殆ど使う人がない古いアやア法則も掲載(但しア変化・伝統アの資料としては非常に有益)等の問題がある。

一方、主に外国人向けの教材は個々の語のアより規則性に重点を置いたものが多い。例えば、田中他(1999)、東京外大留学生日本語教育センター(1999)、河野他(2004)、戸田(2004)、中川他(2009)等。しかし、どれも規則の網羅性はなく、どんな理由で選んだかを明示しないまま、いくつかの規則を提示するのみである。反対に規則より個々の語のアに重点をおいた教材に磯村(2009)、内堀他(2008)、OJAD(峯松2014)等がある。活用形別、意味分野別、拍数・ア型別、旧 JLPT 級別、日本語教科書別等、配列や検索方法に様々な工夫が見られるが、規則は殆ど明示せず、まずは記憶しようという形を取る。しかし、アを正確に習得したい外国人にとって本当に望ましい教材・参照資料集は「ここまでは規則を覚えればアが予測できるが、後は個々の語のアを記憶しなければならない」という仕分けをした上で、規則と個々の語のアの両方を提示した包括的なものである。最近では中国人等にはアに関する知識が豊富な一定数存在する：ア記号が理解でき、音調型の知覚もネイティブに比較的近く、ポピュラーなア規則は知っているという、アに関する上級・超級者が増加している。そういう人向けの教材が必要だが、現在そのようなものは見当たらない。秋永上掲書は上の問題に加えて学校文法の枠で書かれていることもあり、そのままでは使いにくい。

2.2 作成資料の概要

そこで筆者は新たに、各項目につき、カナ・漢字表記、ア記号(数字、見出しに下降位置)、ア規則、規則のために必要なア以外の諸情報(語源情報[アのために必要な場合に限る]、拍数、2要素以上からなる場合の各要素の拍数、語種、ア分類に必要な範囲での品詞、旧 JLPT の級、BCCWJ 短単位語彙表と Tono 他2013の順位等)を付けた主に外国人向け資料集を作成して部分的に小

クラスで試用している。それを分析用に改訂した資料を本稿で用いる。

外国人のための語彙リストは種々あるが、語彙ランク付きが便利である。それに該当し、2014年8月17日現在全体が公開されているものに、国際交流基金他(2002)(以下「旧 JLPT 語彙」)、Tono 他(2013)(以下「頻度辞書」)、松下(2011)等がある。本稿では、松下(2011)は BCCWJ に依存する部分も大きいので省き、それ以外の3つを対象に考察を行う。BCCWJ の短単位は長単位より旧 JLPT 語彙の見出しに近く、形態素を組み合わせることで同数の項目でより多くの語を含められる利点がある。日本人の馴染み度の使用も望ましいが今回は省いた。

万能語彙リスト・順位はありえず、どの資料も使用目的によって短所も持つ。例えば旧 JLPT 語彙につき押尾他(2008)、旧 JLPT 語彙・TM 語彙につきスルダノヴィッチ他(2013)等参照。しかしどれも客観的手順に従って作られたもので一定の有効性は持つ。また複数の尺度によって調査の客観性が高まる。なお旧 JLPT 語彙は新 JLPT 語彙や「日本語学習辞書科研」(砂川2013等)の辞書等が公開されれば、それらに置き換えられよう。

本稿の対象語彙は、旧 JLPT 語彙全項目、頻度辞書のほぼ全項目、BCCWJ 短単位語彙表の順位(rank)1~8000までのほぼ全項目である。但し付属語やそれに準ずる項目、用言の活用形は原則として扱わない。BCCWJ を8000までに限ったのは旧 JLPT 語彙数とほぼ同数ということもあるが、後述の如く順位の低い語は規則による予測性が高まり、個々の語の暗記の必要性が薄れるからである。

項目の立て方は資料ごとに異なるが、相互対照が必要な場合最も細かく分けているものによった。またアを考察する上で2項目以上に分けたほうがよい場合は、3資料とも1項目としていても分割した。例えば「明日(あした)」は名詞3、副詞0だから分割して2項目とした。各資料の単位が異なるために見出しが異なる場合も、各々の項目をそのまま採用した。例えば旧 JLPT 語彙は「御馳走」、BCCWJ は「馳走」が見出しに立っているので両方の項目を立てた。

語彙の順位付けの規準や目的は資料ごとに異なるので、語彙リストには相違がある。しかし共通点もあり、ごく大雑把には旧 JLPT 初級語彙ほど他資料で順位が高いと言える。紙幅の都合で詳細は略すが、旧 JLPT 語彙を基準に簡単に比較しておく。旧 JLPT 語彙は4→1級の順に774、703、3648、3024項目で、うち621項目が BCCWJ にない。残る7528項目の BCCWJ 語彙の平均順位は、旧 JLPT の4→1級の順に2890、2810、6439、10433。同じく、旧 JLPT 語彙のうち4443項目は頻度辞書にないので、残る3706項目の頻度辞書の平均順位は、旧 JLPT の4→1級の順に1237、1547、2474、3149となる。

2.3 アクセント記号・採用するアクセントの基準

ア記号は核の有無と位置を数字で示す方式によるが、特に造語成分のうち後部要素となるものは逆算指定により、前部要素が3・4拍の場合のアを示す。前部要素となる造語成分は後部要素の初頭から数えた核位置(+1、+2、+3…)で示し、この場合も後部要素は3・4拍の場合を想定する。付属語・用言の活用形は本稿では原則として扱わないが、挨拶表現(例えば「おはようございます」)等のアの考察に必要な範囲は含める。2節末の表7規則13~15を参照。

個々の語のアは秋永編(2010、2014)、『日本国語大辞典第2版』、NHK放送文化研究所編(1998)、山田他編(1989、2012)、馬瀬他編(1985)や、最近の社会言語学的調査報告を参照して一つに絞った。一つに絞る際の規準は、①できるだけ規則で説明できる部分を多く、また規則を単純なものにすること、②新しいアを優先することの2点である。①は習得を容易にするためのものであり、②はとくに外国人の場合は若い世代が中心で、同世代の日本人とコミュニケーションする機会が多いためである。日本人は朗読ボランティア等の高齢者の場合もあるが、やはり相対的には若い世代が多いのでこの方針をとった。

①と②の規準は合致する場合が多い。アは変化の結果、より単純・合理的になることが多いからである。稀に①と②が衝突する場合は原則として①を優先させたが、その結果稀な型や古すぎる型になる場合は②に合致する型を採った。

例を挙げる。複合動詞・形容詞は0を採らず-2で統一。「地獄」は3,0だが、0が新で1拍+2拍漢語の規則的・主流アなので0のみを採用。無声化は下降位置がずれないアのみ採用。一方外来語の平板化にはそれほど積極的ではない。若い世代もまだ有核優勢で、平板化は外来語ア規則の例外だからである。

新アの積極的採用は規範性・伝統性を重視する立場からは非難されよう。しかし、アではないが、海外の教室で鼻濁音を習った外国人が来日してみると周りに鼻濁音を話す人がいないので棄てることが多い(竹村2004)。また、文法性判断も超級外国人は若い日本人と一致することが多い(金澤2008)。従って古い複雑なアや規則を教えても結局それを棄ててしまう可能性が高い。

本資料のアは「簡約ア」と言えるが、現実に首都圏出身者の調査で報告されていない型は採用していない。首都圏出身者が使わないアでも首都圏出身者の発音評価が下がらない場合もある(「行かない」3など。松崎他2005。無核動詞+ナイのナに核がある型は、首都圏はともかく日本各地で共通語的アとして使うからだろう)。しかしそこまでは踏み込まなかった。ともあれ従来のア辞典の記述にとらわれている人にはそう思えないかもしれないが、現実の首都圏アの多様性から考えて、本稿の簡約化の程度は非常に低いものである。

2.4 アクセント規則

全項目について該当するア規則（表7）を付けた。ア規則は本資料の語彙の範囲で必要なものに限った。このような制約はあるが本資料の規則はそれなりの網羅性と有効性を持つ。もちろんさらに改善が必要。適用範囲の狭い規則をどこまで載せるかは大きな問題だが、原則として特定形態素のみに該当する規則は、2資料以上に各々10以上該当項目がある場合を除き省いた。規則作成は全般的には本資料からの帰納と秋永編（2010a、2014）により、部分的に窪菌（1995）、同他（2005）、佐藤（2002）、田中（2008）等も参照した。言うまでもなく1項目に複数の規則が適用される場合がある（表9注参照）。なおBCCWJの順位8000以下の語も含めれば若干規則の追加変更が必要になるが、それほど大幅なものではありえない。

共通語ア規則は戦前からの研究の蓄積があり、秋永編（2010a、2014）はそれを統合・改善したものである（秋永2010b）。当然ながら本稿の個々の規則もそれほどオリジナルではあり得ず、本稿で扱う資料の説明に必要な十分なものを取捨選択し、多少改善を加えたものである。紙幅の都合で各規則は圧縮している。

規則には例外が付きもので、例外の場合はその旨を記す。規則はなるべく例外を少なくするよう設定したが、規則があまりに細かく煩雑になる場合は例外に収めた。また傾向にとどまるものも、傾向から外れるものを例外として扱った。このような処置によって、例外的語彙のアだけ記憶すればよいようになる。例えば、動詞辞書形のアは周知のように0か-2が原則だが、このままでは規則とは言い難い。「n拍にあるn+1個の型のどれか」と言うよりはずっとよいが、語ごとに0か-2かは記憶しないといけないからである。ごく基本的な語彙を除き-2のほうが0より所属語数が多いので（表1～3規則番号2）、本資料では-2を規則的な型として立て、0を例外として扱う。この方式だと例外の0の語に注目して記憶し、未知の語に出会った場合とりあえず-2にするという方略をとれる。この動詞アの特徴は早くに日本人向けの田代（1953）等が指摘しているが、不思議に最近の外国人向け教材は採用していない。また諸規則のすべてにこの方式を採用したものはないようである。

2.5 語種

語種はBCCWJの他『日本国語大辞典第2版』を参照した。漢語・外国語起源でも日本語に馴染んでいてアからは和語扱いしたほうがよい場合、そのように扱った。また和・漢・外のいずれか不明の場合も和語扱いがア上好都合な場合が多いのではほぼ同様に処置した。例：「考える、^{かわら}瓦、^{うま}馬」。混種語は各要素の語種を記すが、ア規則に当てはめる場合特定語種の規則を適用した。

2.6 全般的な規則の有効性

有効性は規則ごとに様々だが、全体としては旧 JLPT 語彙71%、BCCWJ 語彙72%、頻度辞書68%と、約7割が規則的である（表8最下端平均の欄）。本資料はアをいくらか簡約化しているから、古いアやより不規則なアも取り込めば規則の有効性は下がる。反面、規則の改善によっていくらか規則性を増す形に修正できる可能性はあるが、それほど大きな変更は望めないだろう。ともあれ、規則はある程度は有効だが、それだけでは説明できない部分もまたかなりある。

2.7 語彙ランクと規則の有効性の関係

語彙の順位と規則の有効性の関係をみると、3資料とも順位が高い（旧 JLPT 語彙は4級に近い、以下同様）語彙ほど規則の例外の比率が高く、順位が低い（旧 JLPT 語彙は1級に近い、以下同様）語彙ほど規則に従う比率が高くなる。表8最下端平均欄によれば、規則に従う率は、旧 JLPT 語彙は4級→1級の順に57、64、70、79(%)、BCCWJは1000項目ごと（但し1000までは500ごと）の平均が56、65、70、71、70、74、76、77、75(%)、頻度辞書は1000項目ごと（但し1000までは500ごと）の平均が55、62、68、67、72、73(%)である。この数字から、初歩の段階で規則を教えても例外が極めて多く、効果的ではないように見えるが、実は規則によって状況が異なる。表7～9の主な規則を表8の3資料平均の有効率によって分類すると以下のようになる。

【a.100%有効】0.1ーンツによる下降位置ずれ、1形容詞辞書形、3.1.1～3.1.3外来語単純名詞の細則、4.5後部5拍以上等の複合語、4.6アルファベット頭文字語、4.7混淆語・複合語短縮、10数詞・時間関係の名詞－1型の副詞的用法での0型化、12.2～12.4擬音語擬態語の多く。【b.99-80%有効】3.1外来語単純名詞、4.3～4.4後部3・4拍結合名詞、6.2.1 1字1拍+1字1拍漢語、7.1動詞連用形からの転成名詞、8.1～8.2一部の接尾辞、11疑問語、13.1体言+1拍助詞、◆6.2.4 1字2拍+1字2拍漢語（◆の意味は後述）。【c.79-60%有効】4.1後部1拍結合名詞、4.2.1後部2拍結合名詞のうち後部動詞連用形、6.1.1前部0型の和語癒合名詞、13.2体言+2拍以上の助詞、15自立語文節+自立語文節、◆2動詞辞書形、◆3.2漢字1字漢語単純名詞、◆6.2.2 1字2拍+1字1拍漢語、◆6.2.3 1字1拍+1字2拍漢語。【d.59-40%有効】0.2 2重母音 ai・aeによる下降位置ずれ、6.1.2前部有核和語癒合名詞、7.2形容詞連用形からの転成名詞、◆4.2後部2拍結合名詞、◆8.3 1・2拍の漢語・和語の助数詞。【e.39-20%有効】3.3和語単純名詞、6.1.3前部ア不明の和語癒合名詞、9和語接頭辞「お（御）」、13.4用言辞書形+2拍以上の助詞。【f.19-0%有効】13.3用言辞書形+1拍助詞、14辞書形以外の用言活用形に助

動詞や助詞が付いたもの全体。

n 拍に n+1 個のア型が存在することから、a~d 辺りまでは規則・傾向として掲げて問題なく、教育にも利用できる。とくに ab は学習者のレベルに関わらず有用である。e は微妙だが一応残した。f は削除してもよいが、語例僅少で今後の検証のために一応残した。

上で◆を付けた規則（表2・表3で太字網掛け）は、順位上位語彙で例外が多く、順位下位ほど有効性が増す。その範囲は2資料以上で順位最上位と順位最下位の欄の数値の差が10%以上あるものとした。平均有効率が中位（c・d）の規則に目立つ。これらは語彙の習得が進んでから教えた方が有効と思われる。例えば3.2漢語単純名詞・6.2漢語癒合名詞は順位上位の語彙に限って規則性が乏しく、順位下位の語彙では規則的かつ数が多い（表3参照）ため、順位下位の語彙の規則の有効率を押し上げる一因ともなる。なお2資料以上で順位が高いほど有効性が増す規則（◆の逆）は見当たらない。

ウェイン（2011）は姓のアについて、基本的な語ほど例外的で1語ずつ記憶が必要なものの比率が高いこと（数量的実証なし）、英語の不規則動詞との類似性（例えば使用頻度が極めて高いbe動詞は不規則）を指摘している。本稿の調査結果のうち◆の規則はこれを一般化し、数量的に実証したものとも言える。通時的観点を含む「基本ア型」（和田1951）とも矛盾しない。但し有効性が順位と無関係な規則も数多くある点にも注意。なお、本稿では姓は漢語・和語の癒合名詞等の一部として考察している（表7規則6の注記参照）。

表7 アクセント規則一覧

番号	項目	規則的なア	顕著な例外となるア・注記(#の後)
0	分節音との関係		
0.1	特殊拍（一・ン・ツ）の場合	下降位置の前ずれあり	一・ンは稀に前ずれなし。#不自然にならない範囲でずれた型を採用
0.2	2重母音 ai・ae の場合	下降位置の前ずれあり	時にずれない。#-2の動詞の場合、3拍5段と複合動詞で後部3拍5段の両者を除きずれなしと処理
0.3	母音の無声化との関係	下降位置の前後のずれなし	#例外なしとして処理したので該当語数の計量省略
1	形容詞辞書形	-2	#0は採らず、-2のみとした。核位置は規則0.1・0.2による下降位置ずれの場合も含む、以下全て同様
2	動詞辞書形	-2	基本的な語にかなり0あり。#複合動詞は-2のみとした
3	単純名詞（副詞・接続詞・感動詞・連体詞を含む）		
3.1	外来語単純名詞（下記細則以外）	4拍以下は1, 5拍以上は-3	古来の語・頻用語の3・4・5拍は0も、また専門家・若年層頻用語は拍数に関わらず0も。4拍「短短短短」（軽軽軽軽）は年齢層や慣用語と無関係に0もかなりある。原語と核位置を合わせる傾向も
3.1.1	外来語単純名詞細則a（3拍語）	「短長」（軽重）で「短」が挿入母音の場合-2	

3.1.2	外来語単純名詞細則 b (4 拍語)	「短長短」は-3	
3.1.3	外来語単純名詞細則 c (5 拍以上)	語末「…短長」と、語末「…長短」かつ「短」が挿入母音でかつ「長」の後半が促音・撥音の場合、-4	
3.2	漢語単純名詞 (漢字 1 字)	1	0 や、キクチツで終わる 2 拍語に 2 も
3.3	和語単純名詞	1・2・3 拍は 1, 4 拍は 0。5 拍以上は-3	#新語・稀用語は左欄の型が多いものの暫定的
4	和語・漢語・外来語の複合名詞 (結合名詞)		#複合名詞は、少なくとも一方の要素が 3 拍以上。後部が単独で使われない漢語形態素を含む
4.1	後部 1 拍	-2	後部要素により 0 も
4.2	後部 2 拍	-3	後部要素により 0 や-2 も
4.2.1	後部 2 拍細則 a (後部動詞連用形)	0 (副詞的に動詞を修飾する場合), それ以外-3	
4.2.2	後部 2 拍細則 b (後部 2 字 2 拍漢語, 後部 2 拍「短短」外来語)	-2	
4.3	後部 3 拍	-3	稀に 0 も。後部 2 型は稀にその核位置を保存し-2 も
4.4	後部 4 拍	-4	後部 2・3 (中高型) は時にその核位置を保存
4.5	後部 5 拍以上, または後部 3 字以上からなる漢語	後部要素のアを保存	
4.6	アルファベット頭文字語	最終要素 3 拍以上は規則 4.3, 4.4 を適用。最終要素 2 拍は-2, 但し出来上がり 4 拍かつ [...短短] は 0	
4.7	出来上がり 4 拍・3 拍の, 混淆語・複合語短縮	0	
5	2 要素で並立・対照・格関係や, 3 要素以上で右枝分かれ構造	2 単位に分かれず複合名詞の規則に従う	2 単位に分かれる。#該当語彙範囲がやや不明確なので複合名詞の規則に従う場合はその項に送り, 例外のみをこの項に掲げる。従って規則成立率は 0 となるので表 2 表 3 は規則 5 を掲載せず (該当語数僅少)
5.1	細則。桁数の異なる複数の数字からなる数字 (例: 26, 138)	各数字に分かれる。但し-1 の数字はその後の数字と繋がりが 1 単位	数字「11, 12, 14シ/ヨン, 16, 17シチ/ナナ, 18」等は, 数字「10」が一応-1 ではないが後と繋がりが 1 単位
6	癒合名詞		#各要素とも原則 2 拍以下。但し後部 2 字 2 拍漢語は規則 4.2.2 を, 前部 2 字 2 拍漢語は規則 4.2 を適用。人名・姓・漢数字もこの条件に合えば暫定的に規則 6 に含めた。形態素ごとの個別の細則が必要
6.1	和語の癒合名詞		
6.1.1	前部 0	0	
6.1.2	前部有核	切れ目の前の拍に核, 但し 2 拍 + 2 拍は 0	「名詞+動詞」かつ前部有核の場合, 3 拍は-1, 4 拍は-2・-3 も
6.1.3	前部のア不明	出来上がり 4 拍は 0	左欄以外は様々
6.2	漢語の癒合名詞		#原則 1 か 0 だが, そのどちらかは以下の細則である程度予測がつく
6.2.1	1 字 1 拍 + 1 字 1 拍	1	0 が一定量あり, -1 がごく少し
6.2.2	1 字 2 拍 + 1 字 1 拍	名詞的意味を持つ場合 1, 動詞的意味を持つ場合 0	名詞的意味でも 0, 動詞的意味でも 1 の場合もある

6.2.3	1字1拍+1字2拍	0	1が少し(主に名詞的意味)
6.2.4	1字2拍+1字2拍	0	1も少し(古くからの語, 結合度が弱い語等)
7	転成名詞		
7.1	動詞連用形から	0型動詞連用形からは0, 有核動詞連用形からは3拍以下で-1, 4拍以上で0	
7.2	形容詞連用形から	連用形と同じ(3拍は-3)	辞書形のアが古く0だったものは-1も
8	接尾辞		#原則として複合(結合)名詞・癒合名詞に準ずるものが多いのでその項参照
8.1	「さん・様, たち・ら(複数)」	それが付く名詞のアをそのまま保存	但し「たち・ら」は平板型には低く付く
8.2	「か」で終わる形容動詞, 「さ」で終わる形容詞からの派生名詞	-3	#「さ」で終わる形容詞からの派生名詞は0や-2の語もあるが, 規則1との関連で左欄は-3で統一した
8.3	1・2拍の漢語・和語の, 助数詞	数字の長さに関わらず, 数字末尾に核	#例外をいくつかのパタンに分類できるが省略。3拍以上の助数詞は結合名詞に準ずる
9	和語接頭辞「お(御)」	後部が3拍以上は結合名詞に準ずるものが多い。但し, 動詞連用形に付くと0。後部が2拍以下でかつ0型名詞に付くと全体が0。これら以外は右欄	後部2拍以下は左欄を除き一つずつ覚える必要がある。 #漢語系のもは漢語の結合名詞・癒合名詞に準ずる
10	数詞・時間を表す名詞の副詞的用法	名詞的に-1は, 副詞的用法で0となる。名詞的に-1以外は副詞的用法でも同じ	
11	疑問語	1	
12	擬音語擬態語		
12.1	ABAB型	副詞的に1, 名詞的に0	#「名詞的」は「～の, ～だ, ～になる」
12.2	AんBり, AっBり	3	
12.3	ABり(と), ABっ と, ABんと	2	
12.4	Aっと, Aんと	0	擬態語意識が濃いと1も
13.1	体言+1拍助詞	体言のアをそのまま保存	助詞ノは-1の名詞を0に変化させる
13.2	体言+2拍以上の助詞	有核の名詞はそのまま低く付き, 0の名詞は助詞が以下の音調となる: 2拍の助詞のアは1。複数の助詞が繋がって2拍以上になった場合は1番目の助詞の末尾に核	左欄のア以外は不規則。不規則なものの例として, 有核体言を0にし, 助詞のアが現れるもの, 少数ながら1拍助詞と同じく体言のアをそのまま保存するもの等がある
13.3	用言辞書形+1拍助詞	-2の動詞の後にはそのまま, 0の動詞の後には助詞が低く付く(全体が-2)	体言につく規則的な助詞同様, 体言のアをそのまま保存する場合も少数だがある。#体言と規則的な型が異なるので注意
13.4	用言辞書形+2拍以上の助詞	-2の動詞は助詞がそのまま低く付き, 0の動詞は助詞が自身のアを持つ(2拍の助詞のアは1。複数の助詞が繋がった場合は1番目の助詞の末尾に核)	左欄以外は不規則。不規則なものの例として, 有核体言を0にして助詞のアが現れるもの, 用言辞書形につく1拍助詞同様, -2の後にはそのまま, 0の後には助詞が低く付く(全体が-2となる)もの, 体言のアを保存するもの等がある
14	辞書形以外の用言活用形に助動詞や助詞が付いたもの全体	動詞辞書形が0か-2かにかかわらず, 全体が-2(例「～ます」)	但し助動詞の活用によりアも変化。また例外的助動詞に「動詞辞書形0は全体が0, 動詞辞書形-2は全体で様々な核位置」等複数パタンあり細則必要。#左欄は挨拶表現(JLPT語彙の3・4級に集中)を念頭に作成。他を念頭に入れるなら変更必要
15	自立語文節+自立語文節	原則として各自立語のアを保存	

表 8 各アウセント規則の規則成立率 (%)

規則 番号	規則 分類	旧 JLPT 語彙 規則成立率 (%)				BCCWJ 短単位 規則成立率 (%)								頻度辞書 規則成立率 (%)				3 資料 平均						
		4 級	3 級	2 級	1 級	平均	001- 500	0501- 1000	1001- 2000	2001- 3000	3001- 4000	4001- 5000	5001- 6000	6000- 7000	7001- 8000	平均	001- 500		0501- 1000	1001- 2000	2001- 3000	3001- 4000	4001- 5000	平均
0.1	a	100	100	100	100	100	-	-	100	100	100	100	100	100	100	100	-	100	100	100	100	100	100	100
0.2	d	67	71	59	46	56	60	33	78	40	20	67	75	57	60	57	67	50	70	50	33	78	62	58
1	a	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
2	c	49	59	71	82	71	65	57	63	69	65	74	80	84	82	71	57	60	63	66	76	80	67	70
3.1	b	81	77	74	81	78	50	58	85	89	85	85	83	80	78	82	75	50	79	86	75	83	80	80
3.1.1	a	-	-	100	100	100	-	-	-	100	100	100	100	100	100	100	-	-	100	100	100	100	100	100
3.1.2	a	100	100	100	100	100	-	100	100	100	100	100	100	100	100	100	-	100	100	100	100	100	100	100
3.1.3	a	-	100	100	100	100	-	100	-	100	100	100	100	100	100	100	-	-	100	100	100	100	100	100
3.2	c	58	62	74	80	73	67	80	75	83	76	86	80	85	90	79	58	50	67	61	81	88	68	73
3.3	e	30	28	38	42	36	34	45	45	39	40	37	44	47	43	41	36	45	36	34	46	26	37	38
4.1	c	70	100	74	67	73	44	80	79	80	63	60	100	80	83	72	100	50	75	67	67	59	63	69
4.2	d	42	50	55	58	54	48	41	50	55	50	58	61	62	60	53	40	0	60	35	27	48	38	48
4.2.1	c	0	100	43	75	54	-	0	0	50	50	100	-	-	75	62	-	-	-	-	-	-	100	72
4.2.2	a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	-	-	100	-	-	-	-	100	100	100	100
4.3	b	83	89	88	86	87	85	83	100	92	70	93	100	100	92	91	100	100	100	85	78	95	88	89
4.4	b	94	75	91	77	88	88	83	100	83	100	93	100	100	100	94	-	100	100	67	83	86	85	89
4.5	a	100	100	-	100	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	100	100
4.6	a	-	-	-	-	-	-	-	100	100	100	100	100	100	100	100	-	-	100	100	100	100	100	100
4.7	a	100	100	-	100	100	-	-	100	100	100	100	100	100	-	100	-	100	100	100	100	100	100	100
5.1	b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	0	85	100	100	89	89
6.1.1	c	88	75	77	83	80	50	-	75	57	40	75	63	80	67	66	60	100	80	60	50	69	65	70
6.1.2	d	50	40	34	53	42	0	67	71	47	23	33	45	56	40	44	67	50	44	27	37	50	41	42
6.1.3	e	20	40	30	37	32	0	25	33	31	46	17	17	9	10	21	8	25	36	70	23	20	32	28

6.2.1	b	67	79	83	85	83	100	93	90	85	74	81	92	93	85	86	100	83	73	89	95	83	85	85
6.2.2	c	36	52	62	66	62	52	64	60	69	65	66	63	54	67	63	53	43	64	55	66	65	60	62
6.2.3	c	56	58	66	78	71	36	48	65	71	71	77	67	79	78	69	67	36	68	65	68	62	63	68
6.2.4	b	73	77	79	89	83	71	82	78	77	79	83	85	88	83	82	76	78	78	76	81	82	79	81
7.1	b	100	100	91	93	93	100	83	88	95	95	94	89	95	90	92	100	82	91	94	93	90	91	92
7.2	d	-	0	-	-	0	100	-	-	0	100	100	100	-	-	67	100	-	0	-	100	0	57	41
8.1	b	88	83	78	-	83	100	-	-	100	-	-	-	-	-	100	50	100	100	100	67	83	86	90
8.2	b	100	-	83	100	95	-	100	-	100	100	100	100	100	100	100	-	100	100	100	100	100	100	98
8.3	d	14	50	60	71	51	42	56	89	30	0	25	57	25	67	49	25	55	73	62	68	76	67	56
9	e	50	67	38	38	47	-	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	-	50	40	25	0	33	27
10	a	100	100	100	-	100	100	100	100	100	-	-	-	-	-	100	100	100	100	100	100	100	100	100
11	b	100	-	50	-	89	100	-	100	-	-	-	-	-	-	100	100	100	-	-	-	100	100	96
12.1	b	-	100	94	100	97	-	-	100	100	100	100	100	100	100	100	100	-	100	100	100	89	94	97
12.2	a	100	100	100	100	100	-	100	100	100	-	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
12.3	a	-	-	100	100	100	-	-	100	-	-	-	-	-	-	100	-	100	-	-	-	-	100	100
12.4	a	-	100	100	100	100	-	100	100	100	100	-	100	100	-	100	100	100	100	100	100	100	100	100
13.1	b	71	100	95	100	94	100	-	100	100	100	100	50	-	50	87	100	100	100	100	100	75	97	93
13.2	c	50	0	74	64	65	33	-	-	100	100	100	100	50	-	67	0	100	71	100	100	-	73	68
13.3	f	-	0	0	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	0
13.4	e	0	0	33	0	14	0	-	-	100	0	-	-	-	-	20	-	-	50	-	-	-	50	28
14	f	70	75	12	13	37	0	-	0	-	0	0	-	-	0	0	0	0	50	0	-	0	20	19
15	c	100	100	84	78	88	0	-	-	100	-	100	-	-	-	67	50	0	-	100	-	100	60	72
平均		57	64	70	79	71	56	65	70	71	70	74	76	77	75	72	55	62	68	67	72	73	68	70

規則有効性100%=a,99-80%=b,79-60%=c,59-40%=d,39-20%=e,19%-0%=f。太字網掛けは2資料以上で最初級・頻度最上位の科目が最下級・頻度最下位の科目より10%以上低い規則

表9 各アクセント規則の該当項目数*

規則 番号	規則 分類	旧JLPT 語彙項目数				BCCWJ 短単位語彙項目数													頻度辞書語彙項目数					
		4級	3級	2級	1級	合計	001- 500	0501- 1000	1001- 2000	2001- 3000	3001- 4000	4001- 5000	5000- 6000	6000- 7000	7001- 8000	合計	001- 500	0501- 1000	1001- 2000	2001- 3000	3001- 4000	4001- 5000	合計	
0.1	a	17	11	30	32	90	0	0	6	3	4	7	3	3	5	31	0	10	21	22	29	48	130	
0.2	d	6	7	27	24	64	5	3	9	5	5	6	4	7	10	54	6	4	10	10	3	9	42	
1	a	62	25	79	59	225	16	14	34	23	19	12	8	9	9	144	23	23	35	18	17	11	127	
2	c	111	167	564	452	1294	107	81	144	135	127	125	104	113	121	1057	108	125	184	169	134	133	853	
3.1	b	48	35	183	170	436	4	12	65	85	113	105	116	119	128	747	4	6	61	63	77	93	304	
3.1.1	a	0	0	3	3	6	0	0	0	4	1	1	1	3	6	16	0	0	1	1	2	1	5	
3.1.2	a	9	3	26	9	47	0	2	5	9	12	5	7	12	13	65	0	1	6	11	5	9	32	
3.1.3	a	0	3	10	6	19	0	1	0	4	2	5	6	3	8	29	0	0	1	4	3	1	9	
3.2	c	26	21	137	88	272	52	30	52	29	38	22	45	34	29	331	19	18	33	31	16	25	142	
3.3	e	229	105	370	197	901	116	83	135	114	95	98	81	90	90	903	175	94	146	124	87	85	711	
4.1	c	10	5	42	24	81	18	5	14	10	8	5	8	5	12	85	1	6	4	15	12	22	60	
4.2	d	19	22	96	52	189	25	22	26	29	24	24	18	21	15	204	5	6	15	31	41	46	144	
4.2.1	c	1	1	7	4	13	0	1	1	2	2	3	0	0	4	13	0	0	0	0	0	1	1	
4.2.2	a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	3	
4.3	b	12	9	104	56	181	13	6	17	12	10	15	9	9	12	103	2	4	8	20	23	19	76	
4.4	b	17	8	56	13	94	8	6	12	12	5	15	8	7	5	78	0	6	5	9	6	7	33	
4.5	a	1	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
4.6	a	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4	4	8	6	9	35	0	0	2	2	3	6	13	
4.7	a	3	2	0	2	7	0	0	1	1	1	2	1	1	0	7	0	1	1	3	1	2	8	
5.1	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	13	13	9	38	
6.1.1	c	8	16	43	54	121	4	0	4	7	5	8	8	10	12	58	5	1	10	5	14	13	48	
6.1.2	d	12	10	86	64	172	4	6	7	17	13	18	22	32	20	139	3	8	16	18	30	16	91	
6.1.3	e	15	5	43	38	101	2	4	6	13	24	18	18	23	30	138	6	4	14	10	13	15	62	

6.2.1	b	6	14	69	66	155	4	15	21	26	19	32	13	28	27	185	2	12	22	19	22	23	100
6.2.2	c	28	33	301	263	625	23	33	78	107	86	88	65	65	49	594	15	30	59	75	71	85	335
6.2.3	c	18	43	287	320	668	36	40	108	85	86	86	94	82	81	698	15	33	79	74	90	66	357
6.2.4	b	60	100	869	892	1921	56	125	250	234	276	262	303	272	253	2031	51	73	204	201	227	211	967
7.1	b	5	13	101	89	208	3	6	18	22	20	31	27	22	29	177	5	11	22	18	29	20	105
7.2	d	0	2	0	0	2	1	0	0	2	1	1	1	0	0	6	1	0	2	0	3	1	7
8.1	b	8	6	9	0	23	5	0	0	1	0	0	0	0	0	6	2	2	4	5	3	6	22
8.2	b	1	0	6	14	21	0	1	0	1	1	2	3	4	1	13	0	1	3	3	8	10	25
8.3	d	14	6	40	7	67	12	9	9	10	1	4	7	4	3	59	4	22	22	39	38	51	176
9	e	6	9	13	8	36	0	0	0	0	0	1	2	2	0	5	0	0	2	5	4	1	12
10	a	12	3	2	0	17	8	2	1	1	0	0	0	0	0	12	3	3	8	7	5	3	29
11	b	7	0	2	0	9	4	0	1	0	0	0	0	0	0	5	5	3	0	0	0	1	9
12.1	b	0	2	18	17	37	0	0	1	2	1	2	2	3	2	13	1	0	2	1	3	9	16
12.2	a	1	4	15	14	34	0	2	2	1	0	7	2	3	3	20	1	3	2	3	6	3	18
12.3	a	0	0	5	4	9	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1
12.4	a	0	3	7	4	14	0	1	3	1	2	0	1	1	0	9	1	3	1	3	3	2	13
13.1	b	7	11	39	15	72	2	0	1	5	2	1	2	0	2	15	5	8	6	3	6	4	32
13.2	c	6	1	19	11	37	3	0	0	1	1	1	1	2	0	9	2	1	7	3	2	0	15
13.3	f	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
13.4	e	1	2	3	1	7	3	0	0	1	1	0	0	0	0	5	0	0	2	0	0	0	2
14	f	10	8	17	8	43	2	0	1	0	2	1	0	0	0	6	3	1	4	1	0	1	10
15	c	11	7	25	9	52	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3	2	1	0	1	0	1	5
合計		807	724	3754	3090	8375	537	510	1035	1017	1011	1019	998	995	988	8110	475	526	1027	1040	1051	1071	5190

*項目数は各該当規則を1としてカウントした。例えば「通す」は規則2と規則0.1の両方が該当し、各々の規則でカウントするので2となる。本文2-1節末の項目数とは異なる

3. 類別語彙について

類別語彙表は方言ア調査やア史研究だけでなく、有型アが母方言の日本人が他方言アを習得する際に有用である。外国人でも共通語アの後で方言アを習得しようとする人には役に立つ。しかし、方言ア調査語彙や方言ア教材の資料としては、類別語彙は以下の問題を持つ。①史的変遷の観点を考慮に入れたものだから現代語・各地の方言ではあまり使わない語も含む、②共通語・共通語アの影響で各地の方言の語彙・アが変化し、アが伝承されにくくなっている語が増えている、③生活変化等で以前なら基本的単語だったが稀用語になったものがある。したがって、現代語から語彙を再検討することは意味がある。

本稿では主に日本人を対象に考えて、頻度（2節で扱った「頻度辞書」による）と馴染み度（天野他1999の文字音声単語親密度と音声単語親密度の合計点による。以下「馴染み度」）の2点から、類別語彙の中からもっとも基本的と考えられる単語を選び、類別語彙表基本語編とでも言うべき語彙リストを提示する。今後種々の目的での利用が期待される。

頻度や馴染み度は話者の地域・属性・興味等によって異なるが、共通語化の進展で首都圏一般人の判定に徐々に近づいているので、とりあえずそれを用いた。勿論万全の判断基準はなく、例えば幼少年期の語彙発達関係の資料なども考慮に入れる必要があろう。また上記2資料には偏りが無いわけではない：前者はやや改まった場面で使う語が目立つ；後者は調査方法を変えれば判定結果もかなり変わりうる。今後改善が必要であり、以下のリストも暫定的である。

類別語彙で最も包括的な坂本他（1998）の全語を対象とする。類別は「早稲田語類」を優先させ、それにはない語は「金田一語類・同補」を採用した。そして頻度辞書・馴染み度ともに上位500に含まれる語、これに該当しなくてもいづれか一方で上位100に含まれる語を採った。複数の漢字表記・意味・調査文脈がある場合、最も高順位のものを選んだ。体言・動詞・形容詞の順に述べる。

体言第一次語彙（184語） 1拍（10語） 1類：^キ気、^コ子。2類：^ヒ日。3類：
^エ絵、^キ木、^テ手、^ニ二、^メ目。X類：^{チャ}茶、^ハ齒。2拍（122語） 1類：^{アネ}姉、^{イス}椅子、^{イシヤ}医者、
^{エビ}海老、^{カオ}顔、^{カゼ}貌、^{カネ}風、^{カベ}金、^{カベ}鉄、^{キヤク}壁、^{キヤク}客、^{クチ}逆、^{クニ}口、^{クニ}国、^{クビ}首、^{コシ}頸、^{コレ}腰、^{コレ}此、^シ是、^シ之、
^{サケ}酒、^{ソレ}其、^{ダレ}誰、^{テキ}敵、^{ドコ}何処、^{トリ}鳥、^{ニワ}庭、^{ヒマ}隙、^{ブジ}暇、^{ホシ}無事、^{ミギ}星、^{ミズ}右、^{ミチ}水、^{ムシ}道、^{モリ}路、^{ツギ}虫、^{ツマ}森、
^{イシ}杜。2類：^{ウエ}石、^{ウタ}上、^{ウチ}歌、^{オト}内、^{カタ}音、^{カミ}方、^{カレ}紙、^{カワ}方、^{キタ}北、^{タビ}旅、^{タメ}為、^{ツマ}次、^{ツマ}妻、
^{ナツ}夫、^{ヒト}夏、^{ヒル}人、^{フユ}昼、^{ホド}冬、^{マチ}程、^{ミナ}町、^{ムネ}皆、^{ムラ}胸、^{モジ}村、^{ユキ}文字、^{アサ}雪。3類：^{アサ}朝、^{アシ}足、^{アス}明日、
^{アナ}穴、^{イナ}孔、^{イナ}家、^{イヌ}一、^{イヌ}犬、^{イロ}色、^{ウミ}腕、^{ウマ}馬、^{ウマ}馬、^{ウラ}裏、^{オヤ}親、^{カワ}皮、^{キン}革、^{キン}金、^{コト}事、^{コメ}米、^{シオ}塩、^{シマ}島、
^{セワ}世話、^{ツキ}月、^{ツチ}土、^{トキ}時、^{トシ}年、^{ニク}肉、^{ハナ}花、^{フー}風、^{フク}服、^{ホン}本、^{ミセ}店、^{ミミ}見世、^{モノ}耳、^{ヤマ}物、^{ユビ}山、^{ユメ}指、^{ユメ}夢、
^{ラク}楽。4類：^{イツ}何時、^{イマ}今、^{ウミ}海、^{カズ}数、^{カタ}肩、^{キョー}今日、^{ココ}此処、^{サン}三、^{ゼヒ}是非、^{ソコ}其処、^{ソト}外、^{ソラ}空、^{シロ}虚、
^{チチ}暗、^{ナカ}父、^{ナニ}中、^{ハハ}何、^{フネ}母、^{ホカ}船、^{ヨル}他、^{アキ}外、^{アセ}夜。5類：^{アキ}秋、^{アセ}汗、^{アニ}兄、^{アメ}雨、^{クロ}黒、^{コエ}声、^{シロ}白、

ハル マエ マド トチ ホー アソビ イナカ オット オワリ カオリ
 春、前、窓。X類：土地、方。3拍（52語） 1類：遊、田舎、夫、終、香・
 カタチ クルマ コトシ コドモ サカナ サクラ トコロ トナリ ナマエ ハジメ マツリ ミナミ ムカシ
 薫、形、車、今年、子供、肴〔魚〕、桜、所、隣、名前、始、祭、南、昔、
 ムスコ アイダ オンナ キノー フタリ ミドリ ムスメ チカラ アタマ アマリ イタミ ウシロ
 息子、間。2類：女、昨日、二人、緑、娘。3類：力。4類：頭、余、痛、後、
 オトコ オモイ コタエ コトバ ナガレ ヒカリ イノチ オヤコ ココロ スガタ ナミダ ウサギ
 男、思、答、応、言葉・詞、流、光。5類：命、親子、心、姿、涙。6類：兎、
 オトナ タカサ ナガサ ヒダリ クスリ タマゴ ヒトツ ヒトリ ユタカ ナカマ
 大人、高、長、左。7類：薬、卵、一、独・一人、豊。x類：仲間。

勿論諸家が通常ア調査で使用している語彙と多く重なるが、漢語の一部は従来比較的調査が少なく、早稲田語彙ではじめて採られた語もある。全般に1拍・3拍は該当語数が少ないが、一つには順位下位の語が多いためである。このことは3拍体言の諸方言間の対応が時に不明確なこと、例えば中央式諸ア内部の地域差・世代差が目立つことと無関係ではなかろう。1拍2類は中央式諸アで最近H0への変化が目立つが、これも部分的には同じ理由によるか。

なお1拍2類、3拍3類などはもともと所属語数僅少だが、上位語に限ると一層乏しくなるので、ア調査の場面では語彙を補う必要があろう。

動詞語彙（122語） 2拍（35語） 1段1類：着、為、寝。1段2類：来、
 デル ミル イク イル ウム オウ オク オス カウ キク シス シル
 出、見。5段1類：行、居、産・生、追、置・措、押・推、買、聞、死、知、
 トブ ナク ヒク ヤル ユウ ヨブ アウ アル カク カツ
 飛、泣、鳴、引・曳、遣、言、呼。5段2類：合・逢、有・在、書・描、勝、
 キル スム ツク トル ナル ノム マツ モツ ヨム
 切・斬、住、付、取、成・為・生、吞・飲、待、持、読。3拍（68語） 1段
 アケル アゲル イレル カリル キエル ステル マケル イキル ウケル オキル オチル オリル
 1類：明・開、上・挙、入、借、消、捨、負。1段2類：生、受、起、落、下・
 カケル ニゲル ノビル ミセル ミセル ワケル アソブ アタル アラウ ウタウ オクル
 降、掛・懸、逃、延・伸、見、見、分・別。5段1類：遊、当、洗、歌、送、
 ナウ カワル コロス サガス チガウ ツカウ ツズク ナラブ ネムル ノゾム ハコブ マナブ ムスブ ワタス ワラウ
 終、代・替・変、殺、捜、違、使、続、並、眠、望、運、学、結、渡、笑。5
 ウゴク エラブ オコル オモウ カエス カエル カカル シメス ソダツ タノム ツクル トドク
 段2類：動、選、起、思、返・帰、返・帰、掛・懸、示、育、頼・恃、作、届、
 ナオス ナガス ナヤム ナラウ ネガウ ノコス ノバス ハシル ハラウ ヒラク フトル マモル モドル ヤスム ユルス
 直、流、悩、習、願、残、残、伸・延、走、払、開、太、守、戻、休、許・赦。
 アルク ハイル アタエル ウマレル オクレル オシレル キコエル ツタレル
 5段3類：歩、入。4拍（19語） 1段1類：与、生、後・遅、教、聞、伝、
 ハジメル ヒロゲル ワスレル アツメル アワセル オボエル コタエル シラベル タスケル ツカレル ナゲレル ハナレル モトメル
 始、広、忘。1段2類：集、合、覚、答・応、調、助、疲、流、離、求。

形容詞語彙（44語） 2拍（2語） 無、良・善・好・佳。3拍（32語）
 アカイ アマイ ウスイ オーイ オソイ オモイ カタイ カルイ トーイ マルイ アツイ
 1類：赤、甘、薄、多、遅、重、堅・硬、軽、遠、丸・円。2類：暑・熱、
 イタイ ウマイ クロイ サムイ シロイ スゴイ セマイ タカイ チカイ ツヨイ ナガイ ハヤイ ヒクイ ヒロイ
 痛・甚、美・旨、黒、寒、白、凄、狭、高、近、強、長・永、早・速、低、広・
 フカイ フルイ ホシイ ヤスイ ヨワイ ワカイ ワルイ カナシイ ヤサシイ
 博、深、古、欲、安・易、弱、若、悪い。4拍（10語） 1類：悲、優。2類：
 ウレシイ キビシイ クルシイ クワシイ サビシイ タダシイ タノシイ ハゲシイ
 嬉、厳、苦、詳・精、寂、正、楽、激・烈。

動詞・形容詞の辞書形のアは体言より単純なので、これだけあれば、(例外的な方言を除き、) 短時間調査では数の上では十分だろう。但し、方言により上の語彙とは異なるアになる語(居、濃など)があればその補充が必要だし、やや改まった語も一部含まれるので、別の基準からふるいにかける必要がある。

各類の単語数は、動詞形容詞に比べて体言のほうが相対的に少ないので、上に次ぐ頻度・馴染み度の語彙リストを挙げておこう。以下は頻度辞書・馴染み

度のいずれかが上位500以内で、もう一方が501～1000までの語彙である。

体言第二次語彙 (123語) 1拍 (7語) 1類: 胃、毛、血。3類: 字、火、芽、湯。2拍 (74語) 1類: 牛、梅、枝、伯父・叔父、伯母・叔母、傷・疵・瑕、君・公、曲、前、先、皿、皺、滝、竹、釣、点、友・伴、西、箱、鼻、髭・鬚、表、蓋、別、床、横、嫁・婦。2類: 彼 [アレと読んでおく]、岩・磐、下、度、寺、橋。3類: 池、鬼、鍵、髪、神、亀、草、沓・靴・履、熊、雲、恋、坂、知恵、波、熱、墓、腹、骨、孫、豆、者、門。4類: 息、運、笠・傘、今朝、種、罪、肌・膚、針、皮膚、味噌。5類: 青、赤、影・陰、猿、鍋、蛇。x類: 奥、火事、鉄。3拍 (42語) 1類: 怒、着物、氷、畳、序・次、机、眠、羊、二日、三日、水門・港。2類: 扉、東。3類: 二十歳。4類: 嵐、面・表、鏡、刀、住居、譬・喩、願、残、袋、別・分。5類: 朝日、油・脂、従兄弟・愛子、柱、炎。6類: 何・孰、烏、素直、背中、互、田圃、鼠、裸、広。7類: 静、確、昌・畑。x類: 向。

第一次語彙と第二次語彙を合わせると、従来方言調査で使用されている類別語彙をかなりの程度おおい、かつ早稲田語彙・金田一語彙補による追加も含む。なぜこの単語が入っているのだろう／入っていないのだろうと思う語もあるので、別の基準による補訂が必要だが、このリストは一つの参考資料にはなろう。ア教材用資料としても、語彙の追加が必要である。

紙幅の都合で稀用語のリストは挙げないが、これまでの方言調査ならば共通語の稀用語も安易に切り捨てることなく、方言における使用を一応確認してきたが、今後は調査しても一層成果があがりにくくなるであろう。

4. 要旨

1節. 音調意識。(a)ア観。中央式のア記号付き方言辞典のうち、正確なもの多くは高低2段階の段階観による。他に3段階によるものが1つ。方向観と段階観の両方が含まれるものに、和田實方式(式・核表記)のよく整備されたものが1つ、未整理なものが1つある。方向観のみによるものはない。中央式諸アの正確な記述には方向観と段階観の両方が必要とする説が有力と考えるが、簡便な実用のためには音調表記として不完全でも2段階観が分かりやすいだろう。(b)核位置。H1とL式有核が意識にのぼりやすい。逆にH式第2拍以降の型相互の区別が意識にのぼりにくく、ネイティブだけでなく余所者にも高低意識や知覚が難しいことが予想される。(c)ア型の一覧表。方言辞典の諸例から、型の一覧表の知識があるほうが誤りや不統一が減ると言えそうである。

2節. ア規則の有効性。旧 JLPT、Tono 他 (2013)、BCCWJ 短単位語彙表 (rank 1～8000) の各語彙を対象に調査を行い、以下の事柄を明らかにした。

本稿で設定された諸規則によってアが予測できる単語は約7割で、残りは単語ごとにアの記憶が必要。有効率は規則ごとに様々だが、順位下位の語彙で高く、順位上位の語彙で低いものが目立つ。また順位上位の語彙には個々のアを記憶が必要なものの比率が高いが、順位下位の語彙ほど規則からアが予測可能なものの比率が高くなる。但し語彙の順位と無関係な有効率を持つ規則もある。

3節. 類別語彙各語の頻度・馴染み度。 類別語彙から、Tono 他 (2013) の頻度、天野他 (1999) の馴染み度の上位語に限って選び、類別語彙基本語リストを試作した。今後別の基準による補訂が必要だが、一つの目安にはなろう。

[付記] 本稿の一部は科研費 (研究課題番号24520505) による研究成果の一部である。

参考文献

- 秋永一枝編 (2010a [2014第2版]) 『新明解日本語ア辞典 CD 付き』三省堂
 秋永一枝 (2010b) 『『(新) 明解日本語ア辞典』からの報告』ア史資料研究会
 天野成昭他編著 (1999) 『日本語の語彙特性 第1期』三省堂
 磯村一弘 (2009) 「アを覚えなおしたい人のための単語リスト」『音声を教える』
 付属 CD-ROM 所収 ひつじ書房
 ウェイン, ローレンス (2011) 「現代東京語の姓のア」『日本語の研究』7 (3)
 1-16
 上野和昭 (2002) 「『池田要 京都・大阪ア資料』所載の動詞・形容詞のア」『早
 稲田大学大学院文学研究科紀要』3, 3-16
 内堀明他 (2008) 『NEW ア付き日本語単語—基礎1500』ソウル: J&C 出版社
 NHK 放送文化研究所編 (1998) 『新版 NHK 日本語発音ア辞典』NHK 出版
 押尾和美他 (2008) 「新しい日本語能力試験のための語彙表作成にむけて」『国
 際交流基金日本語教育紀要』第4号, 71-86
 OJAD—オンライン日本語ア辞書 <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad>
 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語』ひつじ書房
 川上稔 (2005) 『日本語ア論集』汲古書院
 河野俊之他 (2004) 『1日10分の発音練習』くろしお出版
 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版
 窪菌晴夫他 (2005) 「「ストライキ」はなぜ「スト」か」大石強他編『現代形態
 論の潮流』155-174 くろしお出版
 国際交流基金他 (2002) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社
 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)「短単位語彙
 表」ver.1.0 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html

- 坂本清恵他編 (1998) 『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』ア史資料研究会
佐藤大和 (2002) 「外来語における音節複合への区分化とア」『音声研究』 6-1号, 67-78
- 砂川有里子 (2013) 「日本学習辞書編集支援のデータベース構築について」中央アジア国際研究集会「日本語学習辞書開発の支援を考える」
http://jishokaken.sakura.ne.jp/doc/kazakhstan/20131116_2.pdf
- スルダノヴィッチ, イレーナ他 (2013) 「日本語教育用の形容詞の語彙リストと難易度レベル」第3回コーパス日本語学ワークショップ発表, 281-290
http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no3_papers/JCLWorkshop_No3_35.pdf
- 竹村和子 (2004) 「来日中国話話者のガ行鼻音の推移」『ことばと文化』第2号, 長野・言語文化研究会, 48-57
- 田代晃二 (1953) 『標準語のア教本』創元社
- 田中真一 (2008) 『リズム・アの「ゆれ」と音韻・形態構造』くろしお出版
- 田中真一他 (1999) 『日本語の発音教室：理論と練習』くろしお出版
- 東京外大留学生日本語教育センター編著 (1999) 『実力日本語 (上)』アルク
- Tono, Yukio et al. (2013) *A Frequency Dictionary of Japanese : Core Vocabulary for Learners* London and New York: Routledge
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 中川千恵子他 (2009) 『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』ひつじ書房
- 中澤光平 (2012) 「淡路島方言におけるアの地域差と歴史」*Japanese Language Variation and Change conference 2012* (予稿集, 55-58) 国立国語研究所
- 馬瀬良雄他編, 柴田武監修 (1985) 『東京語ア資料』上下 科研報告書
- 松崎寛他 (2005) 「アの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125号, 57-66
- 松下達彦 (2011) 「日本語を読むためのデータベース (研究用)」 Ver. 1.1
<http://tatsuma2010.web.fc2.com/>
- 峯松信明 (2014) 「オンライン日本語ア辞書 OJAD の開発と利用」『国語研プロジェクトレビュー』4-3号, 174-182
- 山田忠雄他編 (1989, 2012) [ア担当は1989柴田武, 2012上野善道] 『新明解国語辞典』第4版, 第7版 三省堂
- 和田実 (1951) 「赤とんぼ」『国語ア論叢』67-90